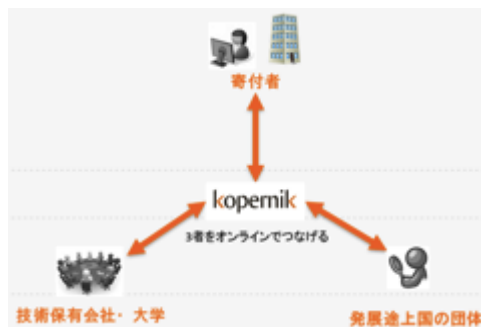


2013年度 湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」報告書 「インターネットを活用した非営利組織のコミュニケーション手法についての研究交流」

1. 調査目的

非営利組織は企業や政府が解決できないグローバルな課題の解決に対して、新しい手法によりその取組を進めるイノベーターとして注目されるが、日本における多くの非営利組織は資金や人材不足の課題を抱えている。このような状況下、クラウド・ファンディング等のプラットフォームを活用し、インターネットで組織のビジョンを伝え、共感を促し、リソースを獲得する手法が注目されている。継続的にリソースを獲得することは組織のスケールアウトにとって重要な要素である。この調査は、インターネットでのプラットフォームにおいて、NGO 組織、寄付者、技術提供者の3者をグローバルにつなげるプラットフォームを構築するNPO 法人コペルニクを事例として、日本の支援者に加えて、途上国現地NGO、途上国受益者、インドネシアに所在するコペルニク事務局を含めた現地でのヒアリングを含むフィールドワークを行い、リソースを継続的に獲得するためのインターネット上でのコミュニケーション手法を調査する。

図：コペルニク仕組み（コペルニクホームページより）



2. 活動内容

日時：2013年8月30日～9月13日

場所：東京、インドネシア

3. 活動成果から得られた考察と展望

本調査で、予定していた日本支援者、現地NGO、途上国受益者、インドネシアに所在するコペルニク事務局のヒアリングを含む現地でのフィールドワークを実施することが出来た。コペルニクは主にアジア・アフリカの開発途上国において41以上の技術を活用した製品の導入を行い、6万人以上の受益者に製品やサービスを提供、社会課題解決をはかっている。近年のクラウドファンディングの伸張に伴い、収入は初年度2010年の約32万ドルから2012年は2.4倍の約77万ドルとなっている。一方で、常勤スタッフ約30名に対し、給与及び手当に割り当てられる金額は約3万ドルに留まっていること、寄付者の一回の支援金が10～20ドル程度であり、リピータ率は10%に留まっていることなど、今度の組織のスケールアウトには、活動地域の拡大と新たな支援者の獲得が必要不可欠ということが分かった。現地NGO、現地受益者のインタビューでは、インターネット上でコペルニクのサービスを見つけ導入に至った経緯、コペルニクへの返済の仕組み、実生活における社会的効果のヒアリングを行った。現地受益者の中では、コペルニクの製品の導入をきっかけに女性が5人1組となり自立支援を促すコミュニティが形成されたなど、

その社会的効果は大変興味深かった。コペルニク側としても近年国際的に女性への関心が集まっているように、今後は女性の支援者の獲得を目指し、社会的にも支援者獲得にも有益なコンテンツ（女性に関心を抱く子どもの話など）を発信して行きたいと考えているとのことであった。

今後の展望としては、本調査により得られた現地の社会解決のニーズやそれらをもとにしたオンライン・マーケティング、コミュニケーションによるリソース獲得のプロセスに関する課題の情報の取得・分析結果から、リソースを継続的に獲得するためのインターネット上でのコミュニケーション手法のモデルを作成し、他団体にも同類の調査を行うことで、より多くの団体で適応可能なフレームワークを今後作成したいと考える。

4. 活動風景

左上：コペルニク資金調達ページ（ホームページより）

右上：現地NGO Puter Inonesia メンバーPak Mambang 氏（インタビュー時撮影）

左下：現地受益者村の女性たち（インタビュー時撮影）

右下：新しいソーラーランタンの様子（コペルニク事務局訪問時撮影）

